エンジェルティアの最強執事

聖幻童子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
エンジェルティアの最強執事

【Ｎコード】
Ｎ２６２３Ｙ

【作者名】
聖幻童子

【あらすじ】
不良の俺、竜堂政宗（りゅうどう まさむね）は高校を中退したその日に車にはねられ変なジジイに異世界へ転生させられる。そこでの俺は、その国の王女であるツンデレ美少女の執事になっていた……　って、ちょっと待て！　普通異世界転生って、勇者になって剣とか魔法で魔王倒すんじゃねーの！？　ところが、ゆるふわ不思議お菓子系ロリロリ侍女やアマゾネスみたいなドＳ筋肉女剣士、フェロモンむんむんの美熟女王妃様や眼鏡ボクっ娘公爵令嬢やらが現れて俺はモテモテハーレム状態に。いや、ちょっとこれ、ヤバくねぇ？ｗｗ　喧嘩上等最強執

事ここに見参！　世の中舐めきってますが、何か？ｗ　（※かなりきわどいエロシーンが出てくる恐れがあります。苦手な方はご注意ください。また、ゆるゆる不定期更新ですが話もゆるゆる日常系で進みます。それでも必ず完結させますので、よければお付き合いください）

第1話　ハゲジジイ

「おらぁ！　こんな学校、こっちから辞めてやらぁ！」
俺は折れたモップの柄を振り下ろし、窓ガラスを次々と割っていく。遠巻きに眺める女子の悲鳴が、俺の逆立った感情を余計に刺激する。
「こらっ、竜堂！　やめんか！」
柔道部顧問の体育教師が、俺を背後から羽交い締めにする。
「放せよ、タコ！　ぶっとばしてやる！」
こうして俺は一年半の高校生活に終止符を打った。

世の中ウゼえことばっかだ。クソ親は俺のことをクソ溜めの汚物みてぇな目で見るし、クソ教師どもは学校の体裁ばっかり気にしやがる。
周りのヤツらは飼い慣らされた豚みてぇに大人しく、俺には何もかもが色褪せて見えた。
大学教授をしている親父は何かにつけて俺と兄貴を比較した。
兄貴は常に成績優秀で優等生。一流大学にトップで入ってエリート街道まっしぐら。
母親の口癖は「あなたもお兄ちゃんみたいだったらねぇ」だ。
「けっ！」
道端に唾を吐き、ポケットの中のタバコを取り出す。くそっ、空だし。
俺は不正入手したタスポでタバコを自販機で買おうとしたが、財布に二百円しか入っていないことに気づく。
「くっそっ！」
蹴った空き缶が歩道を転がっていく。夕暮れ時の町に空き缶の高い音が響き、塾に行くらしい男子中学生が怯えた表情で立ち止まっている。

「なんだよ、うらぁ！」
金がねぇならカツアゲでもしようかと、その中学生へ近づいていく。
「ひっ！」
踵を返して走り出すその中学生を追って、俺も走り出す。
くっそ、速えし！
日頃ニコチン漬けになってるだけに、すぐに息が上がってしまう。
これでも中坊の頃は陸上部に勧誘されたぐらいなんだけどな。
逃げる中学生を追って角を曲がると、いきなり目の前に夕暮れの赤い空が広がる。
車にはねられたのだと気づいた時、俺の頭には今までのくそったれな人生がまさに走馬燈のように流れてきた。
ああ、つまんねぇ人生だったなぁ。
今度生まれ変わったら、もう少しましな人生を送りてぇもんだ。

……って、あれ？
いつまでも夕焼けの赤い空が広がっている。まるで時間が止まったように景色が固定されている。俺はいつの間にか黄昏の空の真っ只中に浮かんでいた。
死んで魂だけになっちまったのかな？　まぁそれもいいか。痛い思いするよりいいし。
妙に達観した気持ちになっていると、目の前に白い光が現れた。
それは次第に強くなっていき、中からハゲたジジイが出てきた。
「ふぉっふぉっふぉ、見事にはね飛ばされおったのぅ」
「なんだジジイ」
そのジジイは真っ白いシーツのような布地を着ていた。そうまさにシーツの真ん中に穴を開けて、そこに首を突っ込んだような感じだ。服っつーより、布だな。
頭には毛は一本も生えてなく、眉毛と口ひげも真っ白だ。
右手に持った木の杖の上部は歪に膨らんでいて、仙人か魔法使い

といった感じだ。
「これ！」
右手に持った杖で頭を叩かれる。
「痛えっ！　って何で痛ぇんだ？」
「年長者は敬え、このバカモンが」
「おいハゲ、質問に答えろ。ここはなんだ？　俺は死んだんじゃねぇのか？」
「ハゲたくてハゲたわけじゃないわい！　まったくこれだから地球の若者は好かん」
「地球？」
そう思った時、このジジイが普通と違うことに気づいた。全身が淡い光に包まれ、瞳が澄んだ水色をしている。明らかに日本人じゃねぇ！
「お、お前神様か？」
「ふん」
ジジイは鼻息を荒くして、口ひげを揺らす。
「そう思うならそれでも構わん。とにかく貴様には選択してもらわなければいかん」
「選択？」
周囲は相変わらず黄昏の空だ。俺とジジイは空中に浮かんだまま静止している。叩かれて痛いってことは、これ夢じゃねぇんだよな？
「このまま地面に叩きつけられぐちゃぐちゃになって死ぬか、生き残るチャンスを得るか……　じゃ」
「よし、死ぬ！」
「ぶっ！」
ジジイは唾を飛ばす。
「き、汚ねぇ！　なにすんだよ！」
「貴様はどうしようもないヤツじゃのう」
ジジイは長くて白い眉毛を下げて、俺を哀れみの目で見る。
「チャンスとかめんどくせぇ。どうせ生きてたっていいことなんか

ねぇし、さっさと死んで生まれ変わった方がよっぽどいいし」
「生まれ変わったらミミズじゃったりしてな」
「う……」
それは想定外だった。
「蚊とかに生まれ変わって叩きつぶされたりしたりの」
「うう……　それは……　イヤだ」
「じゃろう？」
ジジイのドヤ顔がめっちゃムカついたが、ここは一応大人しく話を聞いておこう。
「チャンスってどんなんだよ」
「なぁに、簡単じゃよ！」
ジジイは途端に顔中をしわだらけにしてニコニコする。くそっ、ぶっとばしてぇ。
「美少女を一人助けて欲しいんじゃよ」
「美少女？」
俺は思わず身を乗り出す。俺はこう見えても彼女いない歴＝年齢だ。
「うむ。さすれば貴様は生き残れるじゃろう」
「よし、乗った！」
「ぶっ！」
ジジイはまた唾を吐く。飛沫が顔に掛かって、俺は思いっきり学ランの袖で拭く。
「汚ねぇからいちいち俺の顔に吹き出すなっつーの！」
「お前は本当に軽いのぉ。まあよい、詳しくは転生先で聞くがよい」
そういうとジジイは白い光の中へ溶け込むように薄くなっていく。
「お、おい、ちょっと待てよ！　転生ってなんだよ！　俺は何をすればいいんだよ！」
「一つだけ、貴様には特別な能力を与えておく。よく考えて使うがよい。ではなぁ……」
ジジイの声にエコーが掛かって遠くなっていく。

「おい、ジジイ！　ハゲ！　おい！　お」
途端に体ががくんと落ちる。
俺はそのまま空をどこまでも落ちていった。

第2話　メイドと犬と眉毛

ぽやん。
ん？
ぽやんぽやん。
んん？
ぽやんぽやんぽやん。
んんん？
何か柔らかくていい匂いがするぞ。
「う……」
「あ、気がついたですぅ」
目を開けると俺の目の前におっぱいがあった。
「うわっぷ！」
慌てて頭を上げると、白いエプロンに包まれた巨乳に頭が跳ね返された。
「あん、急に起きあがってはダメですぅ」
日曜の朝やってる美少女アニメキャラクターのような声がして、俺の頭がまた柔らかいものに載せられる。フリル付きのエプロンに包まれた二つの巨大な盛り上がりの向こうに、まん丸い目をしたまん丸い顔の美少女がこっちを見下ろしていた。ほっかむりのような白い帽子の向こうに、青空が広がっているのかわかる。ツバメのような鋭角なシルエットを持つ鳥が一羽、白い雲を横切って飛び去っていく。
「え、ええっと……」
どうやら俺はこの美少女に膝枕されているらしい。なにこのいきなりの萌えシチュ。
「あは、さわさわの髪の毛心地よいですぅ」
俺は頭をなでなでされている。
ここはどうやら野原の真ん中のようだ。お乳、いや落ち着いてく

ると周囲に草の匂いが満ちていることに気づく。遠くで犬の鳴き声がして、美少女は撫でる手を止める。
「ゆっくり起きあがるです」
奇妙なしゃべり方をするこの女の子は、どうやら俺を介抱してくれていたらしい。
俺の頭の中にハゲジジイの声が蘇ってくる。
『美少女を一人助けて欲しいんじゃよ』
『詳しくは転生先で聞くがよい』
「あ、あのよ……　こ、ここはどこだ？」
「次は『わたしはダレ』って続くのですぅ」
イラッ！
「い、いや自分がダレかはわかってるって。お前こそダレだ？」
「うちはショコラですぅ」
「い、いや名前言われても」
少し心残りながら上体を起こすと、周囲の様子が漸く把握できた。どうやらやっぱりここは野原のようだが、少し傾斜している。緩やかな山の斜面のようだ。周囲には赤や黄色の花々が咲き乱れ、季節はどう見たって春。晩秋の日本ではない。学ランでは暑いくらい暖かく、俺は明るい陽射しに目を細める。
野原は校庭より少し広いくらいで、周囲は杉のような針葉樹林に囲まれている。森の中に開けた花畑のような場所だ。
女の子は満面の笑みで俺を見つめている。見た目はどう見ても、メイド喫茶のアルバイトコンパニオンだ。野生のメイドか？　歳は中学生くらいだから、バイトはできないだろうけど。
脇に置かれた籐籠の中には、周りで咲いている花と同じものが数本横たえられていた。
「え、ええっと、ショコラっつったか？　ここは何ていう場所だ？」
「ここはエンジェルティア王国ですぅ。貴方は勇者さんですねぇ？」
「え？」
目が点になった。

「勇者マサムネさんではないのですかぁ？」
「な、なんで俺の名前知ってんだ？」
「あは、やっぱりですぅ」
「むぐう！」
豊満な胸に抱きすくめられる。う、嬉しいけど苦しい！
「ちょ、もが、待て、ちょおっと待て！」
「あん、そんなとこ触っちゃダメですぅ。怒られるのですぅ」
俺はとりあえず乳地獄から脱出する。
「ふう……　ふう……　ゆ、勇者ってなんだよ。なんでお前は俺の名前知ってんだ？」
ショコラというこのメイドコス美少女は、満面の笑みでうんうん頷いている。
「言い伝えの通りなのですぅ。王国の危機に、神官のような黒い衣装を着て現れるのですぅ」
ショコラは豊満な胸で両手を組んで、目にお星様をいっぱいキラキラさせて俺を見つめている。
「王国の危機で勇者？　つまり俺は、ロープレの主人公になっちまったってことか？」
「ろーぷれ？」
ショコラは小首を傾げる。俺は巨乳好きだけどロリコンじゃないから胸がキュンとはしない。このドキドキはこれから始まる冒険への期待だ。たぶん、きっと、おそらく。
「そっかそっか！」
俺は尻や背中についた草っきれを払いながら立ち上がる。
「そんじゃまず国王様に会わないとな！」
「あは、話が早いですぅ」
ショコラは籐籠を持って立ち上がる。ってちっちぇえ！　この娘の身長は、百七十八センチある俺の肩にも届かねぇくらい小さい。胸は発育いいけど、やっぱロリだな。
「じゃ、うちがお館まで案内するですぅ」

「おう！」
てとてとと歩き出したショコラの後について、俺はワクワクし始めた。
これから俺は国王様に会って、伝説の剣とかもらって冒険の旅に出る。ジジイの言ってた「美少女」ってのは、この娘ではないはずだ。俺はそんな単純じゃねぇ。おそらく悪い魔王に囚われていて、勇者の俺が颯爽と助け出す。そんで魔王を倒して世界を救っちゃったりなんかしちゃったりして、美少女と結ばれるんだな。
くうぅ～、いいねぇ！
俺が握り拳で気合いを入れていると斜面の下、森の方から犬が走ってくる。さっきの鳴き声はこの犬か。
「あ、マサムネだ」
「は？」
今なんて？
「勇者様がいつか現れてくださるように、うちが名付けたですぅ。マサムネ～！」
ショコラは大きく手を振りながら走り出す。犬と名前が同じってどうよ。この娘はどうやら天然系の不思議ちゃんらしい……　かわいいから、まぁいいか。
「わんわん！」
「マサムネ～！」
飛びついてきた犬（マサムネ、推定♂）を、ショコラがしゃがんで抱きしめる。ちょっとだけ羨ましいと思ったのは内緒だ、ってええええっ？　俺はマサムネ（犬、現在腰を振っている）を見て驚愕した。
「な、なんだその犬！　ま、眉毛あんじゃん！」
なんと薄茶色で尻尾の大きなその犬（マサムネ、推定雑種）には、ふさふさとした逞しい眉毛が生えていた！
「へ？　犬には普通眉毛があるですぅ」
「ねえよ！」

俺はこの異世界のことを、まだ何も知らないのだった。

第3話　危険なドラゴン

「らんらんるー」
「はぁ」
「わんわん」
半分スキップしながらショコラはずんずん森の小道を歩いていく。マサムネ（犬眉毛付き）は、時折俺の方を振り返って凛々しい顔で様子見をする。
「キリッ」とか擬音が聞こえてきそうで、その顔を見るたびにイラッとする。
「なぁ、その“お館”ってのはどこにあんだよ」
「もうすぐですぅ」
「わん（キリッ）」
イラッ！
森の木陰道は涼しいが、普段運動不足プラスニコチン漬けの俺にはけっこう堪える。そういえばタバコ買えなかったなぁ。
犬っころにいちいちイライラするのは、きっと禁断症状だ。この国にタバコかそれに代わるものってあんのかな。
「なぁ、ショコラっつったか」
「はいですぅ」
「わん（キリッ）」
「いちいちお前が返事すんな！　なぁ、お前あんなところでなにしてたんだ？」
「あは、お花を摘んでたですぅ」
「花？」
まるで童話の世界だな。魔王に世界を滅ぼされようって時に、こんな小さな女の子一人で山なんかに花摘みに出ていいのかよ。
「うちは王女様専属の侍女なのです。お花を王女様のお部屋に毎日飾るのは、うちの大切なお仕事なのですきりっ！」

「王女？」
何か話が違ってきたぞ？
「王女ってあれだよな、国王の娘」
「あは、勇者様は面白いのですぅ。他に王女様って呼ばれる方はいらっしゃらないのですぅ」
「わん（キリックスッ）」
「あ、い、今この犬笑ったぞ！」
マサムネ（犬畜生）は、口の端を持ち上げて牙を見せた。あの表情は絶対に笑顔だった。しかも不敵な。
「あはは、犬が笑うわけないのですぅ。マサムネは楽しい時には尻尾を振るですぅ」
「いいや、絶対笑った！　この犬絶対笑ったって」
「あそこがお館ですぅ」
俺の主張を華麗にスルーしたショコラは、森の切れたところで下方を指さす。そこにはまさに大豪邸と言って差し支えない建物とそれを取り巻く綺麗な庭が一望できた。
「で、でけぇ」
「ここから見える範囲は、ぜぇんぶ国王様の私有地なのですぅ」
「ま、まぁ一国一城の主だからな。そ、そんくらい金持ちなのはあ、当たり前だよな」
正直俺は気後れしていた。今までの十七年間の人生の中、いわゆる上流階級と呼ばれる人種との接点は一切なかった。せいぜいテレビでみる豪邸訪問やセレブタレントぐらいだ。
“いちじょう”ってなんなのですかぁ？」
「かぁ、お前そんなことも知らねぇのか？　一城っつったら城に決まってんだろ。お城だよオ・シ・ロ！」
「おしろ？　マサムネ知ってるですかぁ？」
「クウ～ン」
こいつ城も知らねぇのか？　そんなんで魔王の攻撃をしのげると思ってんのか？　やっぱりここは、勇者の俺が城の造り方から教え

てやんねぇといけねぇらしいな。
そうは言っても、俺に築城の知識なんかあるわけもない。小学生の時、一時期クラスで流行ったプラモデルの大阪城作ったくらいだしな。
まぁいいか、国を守るのは王様の役目。勇者の俺はどうせすぐ旅に出ちまうんだからな。
「おし、さっさと行こうぜ！　だいたい二キロってとこか？」
「“きろ”ってなんですかぁ？」
ちっ、単位まで違うのかよ。これだから異世界はめんどくせぇ。そんくらい融通効かせとけよな。話が長くなっちまうじゃねぇかよ。
「あ～、俺のいた世界での距離の単位だ。こんくらいが一メートル、その千倍が一キロメートル」
「ふぅん、変わった単位ですねぇ」
「ここじゃなんて言うんだよ」
「ここはヤード・ポンド法ですぅ」
「ふうん、そうか……　って、めっちゃ共通点あんじゃねぇかよ！」
「あはは、冗談ですぅ！　メートル法も通じるですぅ」
ショコラは笑いながら、マサムネ（犬、現在こっちを見てまたクスッと笑っている）と坂道を駆け下りていく。
「くっそ、待てごるあっ！」
俺は半分マジでキレて追いかける。あれ？　何か大事な話の流れがあったような……　そんなことが一瞬ちらっと頭をよぎったが、すぐに俺は忘れ去ってしまっていた。

坂道の下の林を抜けると、かなり広い芝生に出る。ここはさっきの野原の五倍以上は確実にある。まるでゴルフ場だ。しかしゴルフ場にしては、そこら中やたらと穴が空いている。といってもそれほど大穴ではなく、大きめのスコップで掘ったくらいの小さな穴だ。
さらにでかい糞が落ちている。明らかに人間のじゃなく動物のだ。しかもかなり大型の。かなり臭ぇんじゃねぇかと思ったが、思った

よりは臭くない。どちらかというと、草の匂いに似ている。
ショコラとマサムネ（犬、すでに俺の存在は忘れているようだ）は、楽しそうに先を走っていく。ちょっと待て、勇者様を案内するんじゃなかったのか？　こんな糞だらけの場所に置いてきぼりにするってどういう……　ん？
俺はいきなり辺りが真っ暗になったことに気づく。すると突風が頭上から吹き付け、芝生が一斉に同じ方向へ倒れる。
「う、うわっ！」
「ぎょえええええっ！」
甲高い鳴き声がして頭上を仰ぐと、空から青いドラゴンが下降してきた。って、えええええっ！　ド、ドラゴン？
体長五メートル、翼長十メートルほどのブルードラゴンは、俺の前に重々しい音をさせて着地する。青い鱗が日の光をきらきらと反射して、すごく綺麗だった。
ドラゴンはぎょろりとした目で俺を見つめ、広げていたコウモリのような膜でできた翼を畳む。俺の腕ほどもある長い三本の爪を芝生に突き刺し、ゆっくりと長い首を持ち上げる。
ああ、周りに空いてた穴や糞は全部こいつのだったんだな。
俺は金縛りにあったように身動きが取れない。恐怖もあったが、何よりも驚愕が一番大きい。非現実的なその存在感は、巨乳ロリ美少女の膝枕や眉毛のある犬より圧倒的にここが異世界だということを教えてくれる。
「わん」
気がつくとマサムネ（犬、怯える俺をドヤ顔で見上げている）が、俺の足に胴体を擦りつけていた。
「あはぁ、ここはドラゴンの発着場なのですぅ」
ショコラが満面の笑みで戻ってくる。
「は、発着場？」
つまりこの恐ろしい生き物はこの世界の人間が飼い慣らしていて、しかも乗用しているらしい。ま、まじかよ……　俺はドラゴンが今

にもファイヤーブレスとか吐くんじゃないかとドキドキしていた。
こういう時は急な動きをしちゃいけねぇんだ。そんで、目は合わせない！
「ドラゴンはとっても大人しい草食動物なのですぅ、危険なことはないのですぅ」
ショコラはそのままドラゴンの前足を撫でる。
「くぅ～ん」
ドラゴンは甘えた声を出し、ショコラへ鼻先を擦りつける。
「なんだ、めっちゃ安全な生き物じゃねぇか。ビビッて損したぜ」
「そうですぅ、ドラゴンは絶対に人を襲ったりすることはないんですぅ」
そう言われるとドラゴンにも愛嬌を感じ始める。うんうん、ドヤ顔する眉毛のある犬よりよっぽど安全で可愛いヤツだ。
「この子の名前はベクレルっていうですぅ」
「名前はめっちゃ危険じゃねぇか！」
「あ、プルトニウムも来たですぅ」
俺は空中で着陸態勢に入った赤いドラゴンを見ながら、軽い目眩を覚えていた。

第４話　王様と王妃様

「ほうほう、そなたがマサムネ殿ですな！」
俺の前では、派手な服を着た恰幅のいいオッサンが満面の笑みを浮かべている。オッサンの名前はラグランジェ＝エンジェルティア。つまりこの国の王様だ。
俺はショコラに連れられ、宮殿みたいなドデカイ建物に来た。蔦の絡まる白亜の建物は、年月と威厳を感じさせた。本物のメイドさんが忙しそうに動き回る中を歩き、奥まった広い部屋に通された。ショコラによれば「謁見室」というらしいが、現代日本風に言えば「応接室」のようなものらしい。ショコラいわく、「王様とお話しするお部屋ですぅ」ということだ。
腰まで沈み込むほどふかふかのソファに座って三十分ほども待たされると、王様と王妃様らしい人たちが俺の前に現れた。
王様はニコニコと人の良さそうな笑顔で俺に握手を求めてきたが、王妃様の方は妖艶に微笑んだまま王様の後ろに立っていた。
ってかすっげぇ美人だし！
派手な服着たメタボ中年にしか見えねぇ王様が、よくこんな美女と結婚できたのか不思議でならなかった。
大きなアーモンド型の目には、バッサバサ動く黒いつけまつげが翼のように付いている。卵形の顔は愛らしいが、真っ赤に口紅の塗られた肉厚の唇はかなり情熱的な印象を受ける。口元のほくろも色っぽい。
胸は間違いなくGカップ以上はあるだろう。ワインレッドのスパンコールがきらきらするドレスの胸元からは、恐竜の卵みてぇな谷間が「こんにちは」している。
きゅっと締まったくびれと豊満な尻。あれに比べたら、ショコラの膝枕なんて低反発枕だな。もはや何を言っているのか自分でもわからなくなってきた。

とにかく非常に妖艶でフェロモンバリバリな王妃様なんだが、いかんせん歳がいきすぎてる。俺に熟女趣味はねぇ。いくら美人でグラマーでも、オバサンはちょっと勘弁だ。

「マサムネ殿？」

オッサ……　もといエンジェルティア王が不思議そうな顔で俺を覗き込んでいた。いかんいかん、集中しないと。

「あ、ああ、すんません」

俺は王様に頭を下げながらも、俺を見ている王妃様の艶っぽい視線が気になってしょうがなかった。

「――で、ショコラが発見したということですな」

いつの間にか王様の話は始まっていたみたいで、俺は前半部分を完全に聞き逃していた。

「は、はぁ」

王様は俺のテーブルを挟んで対面にあるソファにでっぷりと座り、丁寧に整えられた口ひげを揺らせている。口を動かすたびにぷるぷるするもんだから、気になってしょうがねぇ。

「それで、貴方はどこからいらしたのかしら？」

王妃様が俺から目を放さず、色っぽい声を出す。うほっ、やっぱり見た目通りの声だな！

「えっと、に、日本っす」

「日本？　それはどこにある国ですか？」

「ええっと、たぶんこことは違う世界っす」

「違う世界？　異世界ですか？」

俺にとってはここが異世界なんだけど、まぁそういうことなのかな。

とりあえず俺は頷く。

「ふうむ、即座に信じることはできませんがそんなこともあるのかもしれませんな」

「中坊追っかけてたら車に撥ねられて、変なハゲジジイに美少女を

助けたら命を助けてやるってドヤ顔で言われて気づいたらショコラに膝枕されてました」
　王様と王妃様は唖然として俺を見つめている。入り口の脇に控えている派手な服を着た護衛の兵士らしいヤツが、若干身動ぎする。
「あ、あ……」
　王様は椅子から腰を浮かし、俺の方へ身を乗り出す。な、なんだよ？
「も、もしかして、そのご老人はあの方ではなかったですかな？」
　王様は俺の後ろを指さす。入ってきた時は気がつかなかったが、俺の後ろの壁には天井に近い位置にあのハゲジジイの肖像画が掛かっていた。妙に偉そうな顔にイラッとした。
「あああ～！　そう、そうっす！　こいつっす！」
　俺は立ち上がってジジイの絵を指さす。
「やはり！　いや、あなたのおっしゃることを信じますぞ！」
　王様は興奮して、またもやヒゲをぷるぷる揺らしている。顔は興奮して真っ赤だ。
「あなたが救世主だったのですな！　いやはや！　身なりは言い伝えの通りでしたが、このような若い方だとは思いも寄りませんでした！　疑うような質問をしてしまい、失礼しました！」
　王様は俺の両手を握って激しく上下させる。
「わたっ、わたたっ！　そ、そうっすか、それはよかったっす。んであのジジイなんなんすか？」
「あの肖像画の方はポニャック＝エンジェルティアと言い、わしの三世代前の国王になります」
「な！　んじゃあ、神様じゃねぇのかよ！」
　あんな現れ方するから、俺はてっきり偉い神様かなんかだと思っちまったぜ。まぁ全然偉そうじゃなかったけどよ。それにしてもポニャックって！　今度会ったらバカにしてやろう。
「いやいや！　ポニャック王はこの国開闢以来の大魔法使い様でしてな。特に召喚魔法においては、まさに神の領域に達しておられた

方だと聞いております」
「あのハゲジジイがぁ？」
召喚魔法とやらが何のことか知らねぇが、俺をこんな世界に連れて来るぐらいだからまぁ確かに変な力はあるんだろうな。まぁあんなジジイのことはどうでもいい。それより美少女だ。
「そんで俺が救い出す美少女って、どこに囚われてんすか？」
「囚われる？」
王様の動きが止まる。王妃様の微笑が消え、眉間に若干シワが寄る。ちょ、その顔まじで怖ぇっすよオバサン。
「姫は囚われてなどおりませんぞ？」
「へ？」
その時部屋の扉が勢いよく開かれ、金髪碧眼の絶世の美少女が入って来る。その後ろでは、扉にノックダウンされた兵士が目を回して倒れていた。

第5話　伝説の始まり

「お父様！」
美少女は切れ長の目をさらに吊り上げ、細い肩を怒らせてずかずかと足音を立てて突き進んでくる。どうやら何かにかなり腹を立てているようだ。
「あの男はなんなんですの？　『君は宝石のように美しい』だなんて！　わたくしを鉱物資源に例えるなんて、デリカシーがないにも程がありますわ！」
「こ、これ、レオナ！　お客様がいらっしゃってるのにいきなり失礼ではないか」
王様は慌てて立ち上がる。
お父様ってことは……　まさかこの美少女が王女様？　あれ、何でここにいんだ？
レオナと呼ばれたその美少女は、俺の方をちらっと見ると「フンッ！」と鼻を鳴らす。
「こんな小汚い男が客だなんて、お父様もお暇なのね！　とにかくあの男はさっさと首にしてください、いえ、首では生ぬるいわ。一族郎党皆殺しよ！」
「まぁまぁレオナ、話をしよう。マサムネ殿、すまぬがこの後の話はフィオーナに聞いてくだされ」
呆然と立ち尽くす俺を置いて、王様は頭から湯気を出していそうな王女の肩を抱いて部屋を出て行ってしまう。扉が閉まると後に残されたのは俺と王妃様、そして気を失ったままの兵士だけだった。
「ふう、びっくりなされたでしょう？　とにかくまぁお座りになって」
「は、はぁ」
「誰か！」
王妃様はテーブルの上にあった小さな鐘を鳴らす。カランカラン

と小気味良い音を立てると、奥の小さな扉からメイドさんが出てくる。一瞬ショコラかと思ったが、違う女の子だった。
「お茶をここへ。ああ、あと侍医を呼んで、ラオスがまたノックアウトされたわ」
「畏まりました」
ショートカットの黒髪をしたメイドさんは、丁寧にお辞儀をして足音をさせずに出て行く。王妃様は振り返ると、微笑みながら俺を見る。
「ごめんなさいねぇ、いつものことなのよ」
「あ、あの、話が見えないんすけど……」
「そうですわね。お茶を飲みながらゆっくりお話ししますわ」
「は、はぁ」
もう俺は「は、はぁ」しか言えない人形になった気分だ。
王女は確かに美少女だったが、魔王とかに囚われてるわけじゃなかった。それどころかめっちゃわがまま娘のようだ。いくら美少女でもあれは勘弁だな。よほどドM趣味じゃない限り、あの性格じゃ精神ズタボロにされちまう。
メイドさんがピカピカに磨き抜かれたワゴンを押して部屋に入ってくる。俺と王妃様はメイドさんがお茶を淹れ終わるまで黙って座っていたが、メイドさんが一礼して部屋を出て行くと王妃様は改めて口を開く。
「さて、申し遅れましたがわたしはこの国の王妃、フィオーナ＝エンジェルティアと申します」
「は、はぁ」
俺はぎこちなく座ったままお辞儀する。この国の王妃様なんて偉い人なんだから、本当は立ってお辞儀しなきゃなんないだろう。でも俺はこの国の国民じゃない。いや、この世界の人間ですらない。なので王様が言ってたように、あくまでもお客さんとして対応すべきんんだろうな。とりあえず。
「まずは、王がおっしゃっていた『救世主』についてです」

「は、はぁ」
「この国は非常に危険な状況に追い込まれています」
「は、はぁ……　って、はぁ？」
　おし！　ようやく話が進んできたぞ。
「あれっすか？　悪い魔法使いに滅ぼされようとしているとか、強いドラゴンが暴れまくってるとか」
「いえ、我が国はそういう意味では非常に平和、平穏無事でおりますわ」
「あれ？」
　俺はがっくりする。んじゃなんだってんだよ。
「危険な状況というのは、わたしの娘……　レオナです」
「は、はぁ」
　やっぱりこれしか出ねぇな。俺は目の前で湯気を立てる上手そうな紅茶らしき飲み物を一口飲む。
「熱っ！」
「ご覧の通りとても……　いえ非常にわがままでじゃじゃ馬でおてんばです」
「はぁ、そんな感じっすね」
「遅くに授かった一人娘で、わたしも王もレオナを目の中に入れても痛くないほどかわいがって育ててきました」
「いや目ん中入れたら痛いっすよ、普通」
「おだまり」
「はい」
　ひえっ、一瞬空気が凍ったぞ？　このオバサンには冗談通じねぇんだな、よく覚えておこう。
「それで成人するに当たって、王は社交界や政財界へ出ても恥ずかしくないように教育を施すことにしました」
「いわゆる家庭教師っすか？」
「最初は……　そうでした。しかしそれも一週間経たずにすべて辞めてしまいました」

「それは……　辞めさせられたってことっすね」
王妃様は頷く。まぁあの調子じゃ相当わがまま言って困らせたんだろうな。ご愁傷様だな。
「ところがレオナのわがままはわたしたちが思った以上でした」
王妃様は綺麗に整えられた眉根を寄せる。それが妙に艶めかしくて、俺はこっそり生唾を飲み込む。
「家庭教師に留まらず、身の回りの世話をする侍女たちにも当たり散らすようになったのです」
「ははぁ、あれっすね。八つ当たり」
王妃様は少し首を捻るが、小さく頷く。
「まぁそんなところでしょう。家庭教師たちのやり方にも問題はあったのでしょうが、レオナのストレスはかなり大きいのです」
「ストレス……　っすか」
まぁそれは俺もよくわかる。それで大暴れしちまったしな。
俺はその時初めてあの美少女王女に同情した。
「今では王女の身の回りの世話はショコラ一人。護衛でさえ女性の剣士一人しか認めません」
「後はみんなこれっすか？」
俺は手を首に当てて横に引く。つまり「クビ」って意味だ。
王妃様は頷くのとため息をつくのを同時に行う。白く巨大な谷間がふるふると揺れ、俺の目はそこに釘付けになってしまう。
「我が王家にはポニャック王の予言があるのです」
「予言……　っすか」
王妃は俺を潤んだ瞳でまっすぐと見つめる。ちょっと恥ずかしくなっちまって、俺は若干視線を逸らす。
「『王女を立派な淑女として成人させないと、この国はいずれ滅びるであろう』……　と。そして『マサムネという名の神官のような黒衣を着た異世界からの男が、この国を救うだろう』とも」
「えええっ？」
あのジジイ、俺をこの世界に送ったのはそういうことだったんだ

な！

変な力のあるあのハゲジジイのことだ。俺を送り込んだ後に、予言とやらを時間を前後させて変えるなんて朝飯前だろう。つまり俺をこの世界に送ることを決めた時、あいつは過去の予言を変えやがったんだな！　俺にはジジイが舌を出す光景が目に見えるようだった。

「予言は言い伝えとなって代々受け継がれてきました。あなたが予言通りの救世主ならお願いです。あの娘の執事となってこの国を救ってください！」

「どええっ？」

こうして俺の『最強執事』伝説が始まった。

第6話　王女レオナ＝エンジェルティア

「レオナ様、お夕食の時間でございます」
俺は腰を四十五度の角度で曲げて、深々とお辞儀する。
「要らないわ、食べたくないの」
俺の前には豪奢な金髪を波立たせた絶世の美少女が、つんとそっぽを向いている。彼女はレオナ＝エンジェルティア。このエンジェルティア王国という異世界の国の正統な王女だ。国王には正統な世継ぎがおらず、一人娘のレオナがこのまま成人すれば女王としてこの国の頂点に立つことになる。
「そうおっしゃらず、ぜひお出でください。国王様も王妃様も、レオナ様と夕食を共になされることを楽しみにしておりますよ」
「うるさいわね！　要らないったら要らないのよ！」
レオナは豪華な一人がけソファの肘掛けを強く叩くと、立ち上がってテラスへ通じる大きな窓際へと歩いて行ってしまう。
ちっ、ムカつく。でもここは我慢、我慢。
俺はこのわがまま王女の執事としてこのお屋敷で働き始めた。この二日間というもの、この娘には翻弄されっぱなしだ。
元々執事なんてやったこともない不良学生の俺が、見よう見まねでやっても上手くいくはずはない。
執事……　高位の家で家政や事務を執りしきる者。
俺はアンネラというメイド長に、一通りの仕事についてレクチャーを受けただけだ。とりあえず見た目だけはそれっぽくなった。
仕立てのいい生地のスーツにレース装飾のついた白いワイシャツ。清潔な靴下と磨き抜かれて黒光りする革靴。執事以外じゃホストにしか見えねぇ。
俺に与えられた役割は、執事本来の仕事とは大きくかけ離れていた。
王女様を淑女にすること、物わかりのいい素直な女の子にすること

と。ただそれだけ。
本来なら国政に関わる事務仕事なんかもあるらしいが、そういうのはお屋敷の専門的な事務方がやってくれる。
身の回りの世話は女性のレオナには女性の侍女がつく。それがショコラだ。男の俺は侍女にはなれない。そうなると正式に教育係としてレオナに納得させるためには、執事という身分しかなかったのだ。
勉強が苦手な俺としては、余計な仕事がないってことはありがたかった。だがレオナを淑女にするって仕事は、執事本来の仕事より遥かに難しいことだと身に染みてわかった。
そう、まさに身に染みて。
俺は王女から数メートル下がった位置で、なおも食い下がる。今日こそは何か一つでもいうことを聞かせたい。
「レオナ様、今日はレオナ様の大好物である魚介類のパスタが出されるそうですよ？」
レオナは一瞬形のいい眉毛をぴくりと動かす。しかし一秒後には「フンッ！」しか返って来ない。
俺は心の中でドナドナを歌いながら、沸騰しそうになる頭を冷やす。
怒っちゃダメだ、怒っちゃダメだ。可哀想な小牛の目を想像しろ！　涙を浮かべてふるふる小さな体を震わせて、荷馬車で送られていくんだぞ？　売られちゃうんだぞ？　哀しいよな？　切ないよな？　だったらその程度で怒んじゃねぇよ、俺。
「だいたいあんたは何にもできないくせに、なんで執事なんかやってるのよ！　粗野で乱暴で変態で人外で野獣でオークでトロルな変態よ！」
「レオナ様、『変態』が二度入っておりましたよ？」
「フンッ！」
俺はこめかみをピクピク痙攣させ、口角を震わせながら何でもないことのような表情を取り繕う。本当は今にもキレそうだったんだ

が。
　柔らかな布に包まれた豊かな胸が、荒い鼻息に合わせてぷるんと揺れる。ショコラほどではないが、レオナの胸も巨乳と言っていいくらいでかい。いやレオナの場合美巨乳か。性格同様つんと上を向いた双丘の頂は、服の上からでも居丈高だ。
　レオナは白いレース地の内着に、レモン色のフリフリのロングドレスを着ている。手には肘まである白い絹の長い手袋を嵌めていて、直に物に触れることはない。
　こういう少女漫画に出てくるような王女様は普通くるくるパーマでドリルもみあげだったりするのだが、レオナの髪はストレートで背中の真ん中ほどまで長い。うなじのうしろでデカイ宝石をまぶした髪留めで一つに纏め、残りは馬の尻尾のように自然に垂らしている。朝晩とショコラに二時間近く手入れさせている自慢の金髪だ。
　見た目は完璧にセレブ美少女。しかし中身は超絶わがまま娘だ。アキバあたりに行けばそういう王女様のヒールに踏まれて喜ぶ輩もいるだろうが、残念ながら硬派な不良を自認している俺にはそんなドM趣味はない。罵倒されて恍惚になれる変態ではないのだ……たぶん。
「あなたはブタよ、家畜よ、フンよ。生きる価値もないわ。だから今すぐここから出て行きなさい。いいえ、むしろ死んで」
「レ、レオナ様、そ、それは少し言い過ぎでは？　フンに至っては生物ですらありません。排泄物です、もはや死ねません」
「だったら畑の肥料になるなりすればいいわ！　その方がよっぽど世の中の役に立つわよ、この腐れ外道！」
　俺は頭の中で何かがぶち切れた音が聞こえた。
「がああっ！　黙って聞いてりゃこのクソアマ！　言うに事欠いて腐れ外道だのフンだの、もう許せねぇ！」
「フンッ！　ほら、そうやってまた本性を現したわね、野獣！　許せないって、いったいどうするつもり？」
「力づくで言うこと聞かせてやるぁ！」

俺は腕まくりしてレオナに近づく。するとレオナは右手を俺の方へすっと伸ばし、手のひらを向ける。
「マンティコア！」
「やべっ！」
ブチキレていた俺は我に返って踵を返す。またやっちまった！
俺の視界の端には、レオナの手のひらの真ん中に光るエメラルドグリーンの光が見えた。
次の瞬間、俺は巨大な獣の足で床に踏みつけられる。
「ふぎゃ！」
「ぐわおおおうっ！」
俺を踏みつけていたのは体長三メートルはありそうな人面ライオン。尻尾はトゲトゲのハンマーみたいになっている。
レオナはなんと召喚魔法の使い手だった。ハゲジジイの劣性遺伝子がそうさせるのか、その能力はこの世界でもトップクラスだという。どおりで今まで誰も言うことを聞かせられなかったってわけだ。
俺はレオナの執事になってから、毎回神獣やら幻獣やらの餌食にされていた。
「マンティコア、やっておしまい！」
「ぐわおおおおう！」
「ぎゃあああああっ！」
俺はケツに食い込むモンスターの牙に意識が遠のくのを感じる。
「さ、魚介類のパスタをいただきましょ」
俺はカツカツとリズミカルにヒールを鳴らして歩いていくレオナの後ろ姿を見送りながら、伸ばした右手が力なく落ちるのを見た。
「もういっそ殺してくれ……」
「ぐわおおおう！」
「ぎゃあ！」
レオナの颯爽とした後ろ姿は、そのまま無情にも閉じられたドアの向こうに消えていった。

第7話　エルザ＝アマンディア

「あああっ！　もうやってらんねぇ！」

俺は濃紺の空に瞬き始めた星空を見ながら、大きくため息をつく。だいたいあのわがまま娘をどうにかしようってのが間違いだ。ああいう女は一度痛い目を見ねぇとわかんねぇんだ。自分がどれだけ恵まれた環境にいて、周囲に守られて生きていられるのかって。

俺はふと元の世界を思い出す。あそこは最悪のクソみてぇな世界だった。俺には居場所がなかった。成績とか世間体とか、そういうもんばっかりに価値を置くクソ親ども。いつも冷たい視線で俺を見下すクソ教師ども。ロボットみてぇに親の言いなりになってる優等生の兄貴。どいつもこいつもカスだ。

「あ、見つけたですぅ」

入り口からショコラが顔を出す。この屋上は俺のお気に入りだ。タバコがあれば最高なんだが、どうもこの世界にはタバコはないらしい。学校の屋上が懐かしいぜ。

ショコラはスカートのフリルをふわふわさせながら歩いてきて、俺の隣へ腰掛ける。

「おい、仕事はいいのか？　今レオナは飯食ってんだろ？」

「お食事中は給仕さんたちがいるからいいんですぅ。レオナ様のお食事が終わるまで、自由時間なのですぅ」

そう、レオナ専属のショコラに個人で自由に使える時間は非常に少ない。一日三食の食事時と寝てる時くらいだろう。俺を見つけた時は、レオナに花を摘んでくるように言いつけられていたらしい。そんな時でないと外出さえままならない。まさにレオナのために生きてるようなもんだ。

「お前は飯食ったのかよ」

「うちは今ダイエット中ですぅ」

ショコラはニコニコして頬に手を当てる。ショコラは巨乳だが、

全体的には幼児体型だ。でもそれは太ってるってわけじゃない。まぁ「脱いだらすごい」のかも知れないが。
「なぁ、お前腹立たないのかよ。あんなわがまま娘に付き添ってて」
「レオナ様はとても純粋でかわいらしい方ですぅ。みんな誤解してるのですぅ」
「誤解ねぇ……」
俺はため息をついて夜空を見上げる。こうして仰向けになって寝転んでいると、宇宙に吸い込まれちまうような気がする。昔から星は好きだった。
「レオナ様はお寂しいんですぅ。国王さまも王妃様もお忙しくてぇ、昔から遊び相手もいらっしゃらないしぃ」
「遊び相手ねぇ」
俺はあいつの玩具なのかもしれねぇな。
「だから魔法でぇ、いろいろな獣を呼び出して遊ばれてたんですぅ」
「あの化け物どもは、あいつの遊び相手かよ。すげぇな」
今もまだケツが痛ぇ。お陰で腹も減らねぇし。
「でも最近のレオナ様は楽しそうですぅ」
ショコラはニコニコして俺を見ている。あー、あれだ。俺という玩具が手に入ったからだな。
「こっちはお陰で生傷だらけだっつーの！」
「マサムネさんはぁ、今までの執事さんと違って我慢強いですぅ」
「はっ！　あんなんされたら、普通は逃げ出すわな！」
俺は逃げたくても逃げられない。だたそれだけのことだ。なにせミミズとかオケラにはなりたくねぇしな。
「で、お前は何の用で俺を捜してたんだ？」
「あ、そうですぅ。エルザさんが捜してたですぅ」
「げっ！　あの女が？」
エルザとはエルザ＝アマンディアといい、レオナ専属護衛の女剣士だ。身長は百八十センチ近くあり、褐色の肌に筋肉ムキムキのマッチョウーマンだ。何でも南方の国からわざわざこの国に出仕を申

し出てきたらしく、その腕前は滅法強い。おそらくレオナの召喚獣ともいい勝負ができるだろう。
俺はあの女が苦手だ。
「やべっ！　ショコラ、ここに俺がいること黙っててくれよな！」
「う～ん……　でも見つけてしまったしぃ、うちは嘘つくのはイヤですぅ」
「後でお礼するから！　な？」
「う～ん……」
ショコラは口を尖らせて唸っている。俺はショコラの気を逸らすことにした。
「そ、そういえばショコラってフルネーム聞いてなかったよな。俺当ててみようか？」
「ええ？　わかるんですかぁ？」
案の定ショコラはのってきた。俺はショコラのフルネームは知らないが、適当に言えば気も逸れるだろう。
「ショコラ＝デニッシュ！」
うは、超テキトー！　でも好きだからいいや。
ところがショコラは目と口をOの字にして動きを止めている。
「な、なんでわかったんですかぁ？　誰かに聞いたんですかぁ？」
ぐはっ！　当てちまったよ！　ってか、名前までお菓子系かよ。
「ああっ！　いた！」
入り口からぬうっと大きな影が現れる。俺はそれが誰なのか一発でわかった。
「お前、仕事さぼってそこで何やってんだよ！」
蛍光灯のような明るい月明かりの下、燃え立つような金髪と青い瞳。黄金の鎧に身を固め腰には長剣を下げている大柄な女剣士。
「げっ！　エ、エルザ！」
エルザは入り口を塞ぐように腕組みをして俺を睨みつけている。逃げ道はあそこしかない。それがわかってそこに仁王立ちしているのだろう。

「レオナ様が食事を終えられるまでに、本を部屋に運んでおけって言われたろう？　オレだけにやらせる気かよ！」
　エルザは見た目にそぐわず言葉遣いは男っぽく、自分のことを「オレ」と言う。それが妙に似合ってて男前だから困る。
「ま、まだ時間あるだろ？　あいつはさっき飯食いに行ったばっかだぞ？」
「なんでも食事が口に合わなかったとかで、もう部屋にお戻りになってるんだよ！　本がないってご立腹だ！」
「くそっ、あんのクソアマ」
　俺は立ち上がって後ろ頭を掻きながらエルザの方へ向かう。エルザはムッとした表情で俺に道を譲ったが、すれ違いざま俺の股間が鷲掴みされる。
「うごっ！」
「それと、レオナ様に対する口の利き方に気をつけるんだな。オレの目の黒いうちは、レオナ様に対する暴言は許さねぇからな」
　エルザは大きな手で俺の股間を強烈な握力で握りつぶそうとする。
「うげっ、わ、わかった！　わかったって！　うがあ！」
　エルザはにやっと笑って俺の耳に口を寄せる。こんな野蛮な女でも、近づくといい匂いがする。
「レオナ様に手を出したらオレが許さねぇからな。もしどうしても我慢できねぇなら、オレがいつでも相手してやるぜ。カラッカラになるまで搾り取ってやるからな」
　手！　手を動かすな！　あ、ああ……
　俺にＭっ気はなかったはずだ。しかしエルザの手技はハンパない。抵抗する気力そのものが萎えてしまう。
「あああ～、エルザさんだめですぅ！　マサムネさんをいじめては、うちが怒るのですぅ！」
　俺とエルザの周りを、ショコラが腕をわにわに動かしながら走り回る。
「その割りには反応してるぞ？　おらっ、うりうりうりいいいぃぃ

い〜！」
「うぎゃあああっ、ふううぅぅ〜……」
俺は遠くなる意識の向こうに、栗色の花畑を見た。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2623y/

エンジェルティアの最強執事

2011年11月20日00時13分発行